

「いらない」と「もったいない」の考古学

7. 古墳時代の再利用（約1700年前～）

古墳時代になる土器以外に円筒埴輪を棺として利用することも認められます。さらに埋葬に関わることでは、古墳の主体部や土坑墓で、埋葬される人の頭部にあたる場所に須恵器の坏の口縁を下に伏せた状態で置き、土器を枕とした例が見つっています。土器を枕にすることは、この時期の風習の一つとなっていたようです。

こういった埋葬に関わるもの以外に井戸への再利用があります。守山市弘前遺跡では、古墳時代の丸木舟の舟体の一部が分割されて、井戸枠に再利用されています。舟は使わなくなれば、大きな丸太くり抜きの木材となり、一方、井戸は水を貯めるため大きな井戸枠が必要です。弘前遺跡の例は両方の目的が上手く合致した例であるといえます。



土器枕出土土坑墓（高島市高田館遺跡 古墳時代）



(上) 井戸 (下) 井戸枠に転用された丸木舟（守山市弘前遺跡 古墳時代）



かまどの支柱に再利用された土師器甕（守山市吉身西遺跡 奈良時代）



(左) 転用硯 (右) 内面に漆が付着する須恵器 (東近江市下羽田遺跡 奈良時代末～平安時代)

8. 飛鳥～平安時代の再利用（1450年前～）

飛鳥・奈良時代の堅穴住居には、調理のための造り付けのかまどが付属しています。このかまどには土器を火にかける時、土器を支えるために地面に支柱石と呼ばれる石が埋め込まれています。稀に石の代わりに土師器の甕や高坏を使う場合があります。

また、奈良時代になると、遺跡から文字資料も多く出土します。文字は墨で書かれ、墨を摺るための硯は専用のものが作られています。これらの硯以外にも、須恵器の破片に墨痕がついた転用硯と呼ばれる須恵器を硯の代わりに使用することも多くなります。須恵器の中には、漆が付着しているものもあります。これは漆の製作の際のパレットに使われたと考えられます。

古墳時代にも見られた舟材の井戸枠への再利用はその後も行われ、井戸枠にはいろいろな物が利用されています。草津市中兵庫遺跡では、平安時代の扉が井戸枠の一部に使用され、長浜市塩津港遺跡では、平安時代の板づくりの構造船の一部が建物に付随する側溝を渡るための踏み板として再利用されています。

はじめに

ゴミと資源の再使用、再利用は現代社会の大きな問題となっています。こうした問題は今に始まったわけではなく、昔からあったものであると考えられます。遺跡から見つかる廃棄された遺物がゴミにあたります。遺跡からみつかるゴミは、必ずしも昔に捨てられた状態とは限りません。水辺に近い場所や地下水位が高い場所では、骨、植物、木器などの当時に近い状態で発見されます。一方、内陸部の乾いた場所では、残っているのは土器や石器、鉄器などの腐食してなくならない遺物がほとんどです。

こうしたゴミは当時の人々の生活の術を表しており、当時の人々の再使用や再利用の跡が見つかります。このうち、再利用は物の用途が変わるため識別は容易です。再利用には同時代的なものと同時代を超えたものがあります。

1. 水辺のゴミ

琵琶湖には多くの湖底遺跡があります。その一つが大津市栗津湖底遺跡第3貝塚です。貝殻の積み重なった貝塚は、現在に言い換えれば、ゴミ集積場で、縄文時代中期初めの栗津第3貝塚から多種多様なゴミが見つっています。その内訳は、セタシジミなどの貝殻、イノシシ・シカ・スッポンなどの動物、コイ、ギギ、ナマズなどの魚、ドングリやトチの実などの食料残滓、土器、石器、木器などの生活道具、土偶などの信仰の道具などです。こうした水辺のゴミには当時の生活の多くの情報が隠されています。



水辺のゴミ（大津市栗津湖底遺跡 第3貝塚 縄文時代）

2. 内陸のゴミ

内陸の乾燥した土地の遺跡のゴミの主役は土器になります。発掘調査では、よく「土器溜まり」、「土器廃棄遺構」などと呼ばれるゴミの集積場が見つかります。この集積は、水辺の遺跡とは違って、食料などの生ごみは腐食して土に帰るため、縄文時代以降、主たる道具である土器類のみが大量に穴などに捨てられ、残ることから形成されます。土器と共に縄文時代・弥生時代では石器が、時代が新しくなるに従って、鉄器・石器が土器とともに捨てられています。



内陸のゴミ（東近江市土位遺跡 平安時代末～鎌倉時代）

3. 縄文時代の再使用（約 10,000 年前～）

縄文時代を通じて一般的な再使用の例は、土器を補修して使用することです。粟津湖底遺跡第3貝塚から出土した土器の中には、ひびが入った土器の両側に補修孔と呼ばれる穴を石錐で穿ち、樹皮などで固定し、割れないようにして、再使用しています。これは縄文人特有の土器の使い方です。西日本では、弥生時代以降には認められないものです。大事に土器を使ったことが窺えます。こうした補修孔は縄文時代早期末から前期に流行する玦状耳飾にも認められます。玦状耳飾に穿たれた孔の中には、補修だけではなく垂飾として再利用するためのものも認められます。



補修孔と結束紐（大津市粟津湖底遺跡 縄文時代中期）

4. 土器の再利用（縄文時代）

縄文時代早期の終わり頃には、縄文人は琵琶湖や内湖周辺に生活の拠点をもつようになります。こうした遺跡から出土する土器の中には、自然に割れたとは思われない長楕円形や円形の土器の破片が見つかります。こうした土器は土製円板と呼ばれる、縄文時代以降にも見られますが、時代や時期によって用途は違ったものであったと考えられます。

縄文時代早期の土製円板の中には、土製円板の上下に切り込みを入れたものがあり、魚を取るための網のおもりとして再利用されたことがわかっています。縄文人の水産資源への積極的な活用がこうした土器片の再利用を促したのかもしれない。

また、近江八幡市上出A遺跡からは、縄文時代前・中期の土器片を加工し、石鏃を模した土器片鏃と呼ばれる非実用品も出土しています。

土器は、煮炊きや貯蔵などの日常生活で使われています。縄文時代中期の終わり頃になると子供の遺体や胎盤を土器に入れたりする風習が中部高地方面から伝わります。その後、縄文時代晩期には、日常使われていた土器を利用することが活発になります。大津市滋賀里遺跡では、東北地方の特徴を持つ土器に新生児が埋葬されています。

こうした土器の棺への再利用は弥生・古墳時代はもちろんのこと古代・中世でも認められます。



玦状耳飾（左）と土器片鏃（近江八幡市上出A遺跡 縄文時代前・中期）



土器片鏃と土製円板（近江八幡市弁天島遺跡 縄文時代早・前期）



棺への再利用（大津市滋賀里遺跡 縄文時代晩期）

5. 石器・石の再利用（縄文時代）

石器に使われる石は、近隣で採れる石からサヌカイトや結晶片岩など遠方からわざわざ運んできた特別な石もあります。こうした石器は、土器以上に再利用されています。

磨製石斧や石棒は、折れて使用できなくなると、石器製作や木の実を割ったりする叩石へと利用されます。また、東近江市下羽田遺跡では、縄文時代草創期の石器をどこからか拾って来て、縄文時代晩期に再利用したのではないかと思います。また、配石遺構と呼ばれる祭祀に関わる遺構にも、日常生活で使用していた砥石や炉石を再利用していることがあります。

このように縄文人は、限られた資源を巧みに使い生活していたことがわかります。

6. 弥生時代の再利用（約2,500年前～）

縄文時代にも見られた土器の棺への再利用や土器片の加工は引き続き、この時代になっても認められます。土製円板は、中央に孔を穿った有孔円板が多く認められます。有孔円板は、糸を撚るための紡錘車の可能性が考えられ、石製や土製の紡錘車を補うように使われます。

弥生時代になって、新たに導入された墓（方形周溝墓）では、埋葬の際、日常で使われた壺や甕を用いた祭祀が行われ、その後、土器は墓に置かれます。これらの土器には、日常の器から墓に供えるための器に変える目的で、土器の側面に小さな孔を穿った土器なども認められます。

石器では、粘板岩や頁岩等を用いた石庖丁や各種石斧などの農具や工具、石鏃や石剣などの武器の磨製石器が一般化します。こうした磨製石器には、特定の石材が使われることが多く、いろいろなものに再利用されます。

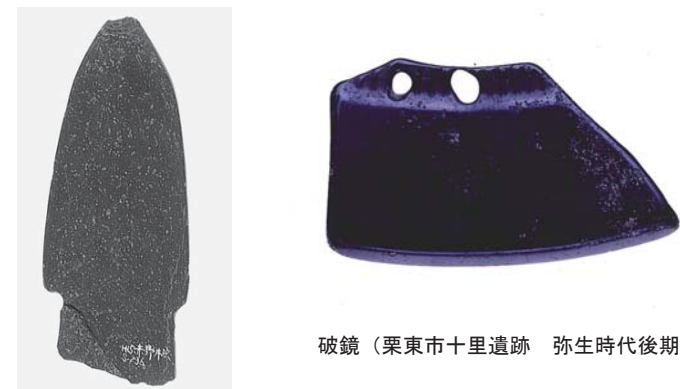
栗東市十里遺跡では、弥生時代後期の帯状銅剣や鏡の青銅器を再利用されたものが見つかります。それらは、いずれも一部に穴を穿ち垂飾に再利用されています。また、鏡は破鏡と呼ばれる後漢時代に作られた内行花文鏡の破片を磨き、利用しています。当時、貴重な青銅製品を使用しており、呪具として用いられ、特別な人物が所持していたものと考えられます。



配石遺構（甲良町小川原遺跡 縄文時代後期）



方形周溝墓出土供献土器（守山市赤野井浜遺跡 弥生時代中期）



破鏡（栗東市十里遺跡 弥生時代後期）

石庖丁から石剣への再利用（守山市赤野井浜遺跡 弥生時代中期）



帯状銅剣の再利用品と帯状銅剣復元装着例（栗東市十里遺跡 弥生時代後期）